

街の記録を編みあげるデジタルアーカイブ

Digital Archives of City Memory Woven from Photographic Records

川嶋稔夫 木村健一
Toshio Kawashima Kenichi Kimura

公立はこだて未来大学
Future University - Hakodate

Modern society produces huge amount of records in our everyday life. As a result, our society stores large collections of photographs unorganized in our home. We recognize that "weaving large collections" is necessary to maintain modern archives of our culture. In this study, we aim to design a system that assists citizens to weave our history from photo collections by interactive process.

1. はじめに

都市の記録は、地域の過去と現在を理解し未来を創造する上で不可欠な情報源である。このような機能を受け持つ国家や県レベルの機関として、資料館(アーカイブス)が存在するが、市民のいとなみを記録する地域レベルでの資料館はきわめて少数である。このため、地域のもつ記録は個人や団体が個別に収集、保存しているにすぎず、アーカイブスとして体系的に利用するには至っていないのが現状である。

著者らは、民間に保存されている写真をデジタル化して収集し、地域の写真アーカイブを構築する試みを通じて、地域の記録を編み上げてゆくための手法を模索している。

もちろん、すでに Youtube や Flickr に代表される画像の集積は世界規模で行われているが、地域の記録を市民の記憶もとに編みあげるといふ地域アーカイブの視点からみると限定的な役割しか果たしていないと考えられる。

本研究では、市民が保存している写真をデジタルアーカイブ化として編みあげるプロジェクトについて紹介するとともに、地域のコミュニティに着目し、対話的方法によって写真アーカイブを編みあげる試みを紹介する。

2. 編みあげを必要としている街の記録

著者らの住む函館市は、幕末に写真技術が導入されて以来、昭和前半までの多くの写真記録が公的に収集されて市立図書館に残されており、歴史資料として多くの研究に利用されている。しかしながら、戦後の写真機の普及に伴って、資料としての写真資料が広報写真等に限定され始め、質的に薄いコレクションになってしまった。

一方で、市民の所有する写真は私的に撮影したものが大半であるが、都市の記録として価値のある事物や風俗を記録しているものが多く含まれ、潜在的価値は極めて大きい。

2009年に開港150周年を迎える函館、横浜の両都市は、この点に着目し、市民の所有する写真を、関係する人々の記憶を介して記録し、アーカイブとして編みあげるプロジェクトをそれぞれ立ち上げ、連携することにした。歴史的に関連深い那覇もこれに加わり、現在では3都市が連携して、市民の写真アーカイブを構築する試みを進めている。

3. 地域写真アーカイブ構築の試み

地域写真アーカイブスを構築するためには、写真をデジタル化して集積し、編みあげ、活用するにいたる持続的なシステムが必要である。地域社会では、写真を所有する層、収集プロセスに興味をもつ層、写真の利用に興味がある層が異なっていることから、これらの人たちを関連付けるシステムが必要である。

これまで図書館等に蓄積されてきた写真は、個人の収集物等の寄贈や購入などのプロセスを経たもので、収集の時点で写真の記録の価値に関する確認や評価を行っている。市民が所有している写真をデジタルアーカイブ化する場合、大量の写真について地域の記録として抜粋し、それらを地域の記憶に関連付けるプロセスが必要になる。

本研究では地域のコミュニティが所有する写真に着目し、ファシリテータとの対話的プロセスによって写真アーカイブへ編みあげる手法を試みた。

4. コミュニティ写真のアーカイブを編み上げる対話的方法

コミュニティには構成員が保存している数多くの写真があるが、多くは死蔵に近い状態で眠っている。これらの写真に着目し、デジタル化したうえで上映会を開催する取り組みを実践した。コミュニティの記憶を編み上げる対話的方法として述べる。同方法を導く際のファシリテータの役割と、「共同鑑賞」によって生ずる「対話」を支援するためのインターフェースデザインのあり方について論ずる。

4.1 コミュニティ写真のアーカイブ化

対象とした写真は函館市内で昭和20年代から華道と茶道に関わり、その指導者として現在も活動を続けているS家のRさんと、後継者で母子関係にある同家の40歳代後半のNさんが保存していたものである。

対象として選んだ理由は、このコミュニティが高齢化の進捗にも関わらず、現在も活発に活動中のメンバーが多く、今後も未公開の写真を幅広く収集できる事と活動の継続を期待できるためである。また、この取り組みを通じて、他の同様のコミュニティの活動を誘発する可能性があるからである。

今回の分量はアルバム3冊と未整理写真が325枚であった(図1-(1))。この中から「Web上で公開可能」で「Rさんとともに長年活動をしてきた同年代のWさんと上映会を行う際

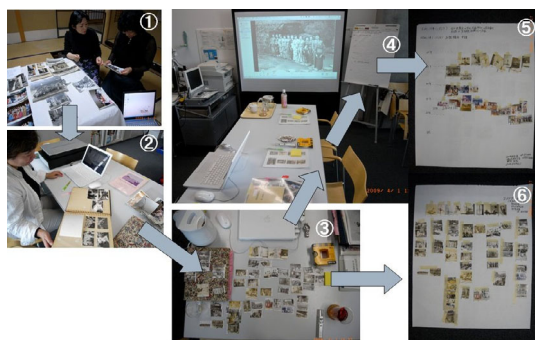


図 1: 写真アーカイブを編みあげる過程

に、話がはずみそうなもの」という二つの条件付きで、N さんを選択してもらった。その結果、108 枚をスキャナでデジタル化できた (図 1-(2))。年月日の入った行事集合写真を除き、過半は文字が未記入で撮影時期や場所が不明だった。同時代を生きてきた R さんと W さんの対話で生ずる時期の特定や逸話を元に N さんの知識や記憶を加えて、コミュニティの写真アルバムを Web 上に作ることを目標としてもらった。

4.2 上映会の共同鑑賞と対話

開催の目的は年表を記した模造紙を Web サイトの画面に見立て、写真を貼って行く活動を通して、撮影時期を同定しエピソードを記録する事と、同画面が活動の支援につながるかを確認するためである。なお、記録に際して共同鑑賞で生ずる対話のスタイルが有効なことは確認済みである (川嶋 2008)。

上述の三名が参加して 2009 年 4 月 1 日に実施した (図 1-(4))。上映時間は 2 時間。様子をビデオで撮影した。N さんは、同コミュニティ内で次代を担う事が期待されており、自身も過去の活動を振り返る機会を得たいと考えていた。そのためファシリテータとしての役割を担ってもらうことにした。N さんは仕事上の必要性から、パソコンの操作に習熟している。そのためパソコンの操作は N さんが行った。

Google が提供している写真アルバムソフト Picasa を一種のプロトタイプとして用い、アルバムのページ順に対応する形で上映した (年代順の経過が概ね保たれていると予想した為)。写真の内容は作品や行事、稽古、展覧会風景、稽古仲間との旅行記念などであった。N さんの手元には、デジタル化した写真をカード型に印刷して置き、配置を簡単に換えられるようにした (図 1-(3))。上映会中の発話に対応して、昭和 20 年～現在の年代を記入した年表用紙 (図 1-(5)) と仮配置用紙 (図 1-(6)) に分けて貼るようにしてもらった。

4.3 特徴的な活動で生ずる 4 種類の写真配置パターン

これらの活動を観察した結果、特徴的な扱い方が大きく分けて 4 種類あることを明らかにできた。年表用紙に貼られた写真は、1) 日時や行事内容が記入されている為に年表用紙に直ぐに貼られ、2) 位置が定まった 1) の写真をヒントに位置が定まる。対して仮配置用紙に貼られた写真では、3) 「このあたりかなあ」という発話が頻繁に現れ、被写体の人間関係について「この人とこの人が一緒だから、 の頃じゃない」といった日時や行事が想起される事があった。厳密ではなく大雑把な配置になった。机上にばら撒かれたままの写真 (図 1-(3)) は、4) ユーザが良くわからないが何となく類似点を感じて並べてみたりする仮置きとして扱われた。「この時期じゃないの?」とか「全くわからない」という不明瞭なコメントが付く

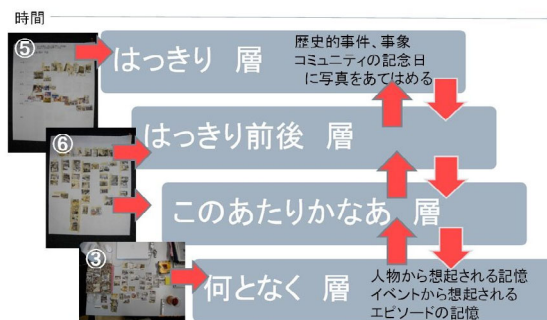


図 2: 4 種類の写真配置パターン

事が多かった。

1), 2) の写真配置は一度定まると動かされることは稀で、3), 4) 間では何度も写真が行き来し、それぞれの領域でも配置が発話に影響されて頻繁に動くことが観察された。特に 4) については、自由度が高い領域だという安心感から、鑑賞者独自のルールで配置換えが行われる姿が見られた。白黒写真とカラー写真を分ける事で大雑把に年代を分けるといった事例や、年月日は不明だが作品だけをまとめるといった事例である。

これらの活動を誘導していく上で、上映会の進行に加え、写真の配置、移動の補助や発話の誘導など、ファシリテータの役割の重要性がクローズアップされた。

4.4 タイムラインインタフェースのデザイン

活動を観察した結果をふまえ、概ね 4 種類の扱い方を反映した層 (タイムライン状のインタフェース) をデザインすることにした (図 2)。

上の層に行くほど、年月日やエピソードのはっきりした写真がユーザによって配置される。下に行くほど写真の位置や意味が不明瞭だが、共同鑑賞や対話に際してダイナミックにアーカイブを編み上げる体験を誘発することになる。上の層から順に、発話を元に 1) 2) 3) 4) に対応して「はつきり層」、「はつきり前後層」、「このあたりかなあ層」、「何となく層」と仮に命名した。

実装イメージをつかむために現在は Picasa の Web サイトを用いている。上の層に写真を上げていく際の支援に有効な、人物の同定を行うために「顔認識」の仕組みを活用している。実装にあたっては、4 つのタイムラインと顔認識の仕組みを組み込むことにした。

5. まとめ

市民が所有する写真を街の記録 (写真アーカイブ) として編みあげるための試みについて報告した。ファシリテータが関わって、コミュニティが所有する写真を共同鑑賞することで、あいまいさを考慮しながらタイムライン型に写真を編みあげる手法の可能性があきらかになってきた。

地域写真アーカイブプロジェクトの実践を通じて、これらのシステム化と情報技術による支援法の確立をめざしたい。

参考文献

[川嶋 2008] 川嶋稔夫, 木村健一, 永井寿憲, 越谷千紘, 鑑賞によって編み上げるデジタルアーカイブ, 第 22 回人工知能学会 1 A2-4, 2008